



目に見えない人間性？

——イソップ童話で考えられること



イソップ童話と言えば、「うさぎとかめ」など動物を主人公にしたお話から考えさせられたことがあるという人もいらっしゃるかと思います。

13日の「なかよし学習会」(伊倉ふれあいセンター) 開講式で、いもとようこさんの『イソップどうわ』(2017年2月、金の星社)という絵本から「おひやくしょうと3にんのむすこ」という話を読みました。

いもとさんは、

イソップのおはなしは
わたしたちが いきていくうえで
やくにたつ ちえ、きょうくんが
いっぱい つまっています。

おはなしを よんだあと、
みんなではなしあってみるのも
いいでしょう。

と誘っています。

この絵本には15の童話が入っています。その中から私が前述の作品を選んだのには理由があります。それは、このおひやくしょうさんが、人にとっての「たからもの」がなんなのかを教えてくれるからです。

漢字を覚えるために、何度も繰り返し読んだり書いたりして練習する。計算が速く正確にできるようになるために、時間制限の中で問題を数多く解いてみる。

こうした基礎的・基本的な知識・技能は、「目に見える学力」(数値的に測れる認知能力)と言われます。

「なかよし学習会」で学べるのは、そうした「目に見える学力」のみではありません。参加者を代表して決意表明をした6年生の言葉に「**今の自分を振り返りたい将来のことを考えたいするので、勉強になります。**」とあったことからそういえます。

また、10年後と言わず現代でも先が見通しにくい時代です。そうした中では、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」を涵養することが求められます。

イソップは紀元前6世紀ごろのギリシャの寓話作家です。しかしながら、その作品は決して古くはありません。むしろ現代でも、そして今後も学ぶことの意味、人間性とは何かを考えさせてくれそうです。そうした観点から未来の子供たちにも語り継がれ、読み継がれるべき普遍的な価値があります。私は玉名市民図書館から借りました。みなさんも一度手に取って読んでみられてはいかがでしょうか。